



バッファロー遊学記

若者

相本三郎*

1979年の夏も終る頃、泉教授より、アメリカはバッファローのロズウェル・パーク記念研究所というニューヨーク州立のがん研究所に行くよう申しつけられた。この研究所はアメリカで最初に設立されたがん専門の研究所とのことであったが、バッファローの名前を聞いた瞬間脳裏をかすめたのは、いつか読んだ新聞記事のことであった。“北米 大寒波に襲われる 数十名凍死 ニューヨーク州バッファロー”こんなタイトルではなかったかと思う。早い話、これはアメリカのシベリヤ送りだ。と心の中でつぶやいた。して、その罪状は、とあれこれ考えてみるに、多分“喋りすぎ”というあたりではなかったろうか。ともあれ、その年の暮れには、地球の裏側できっちり氷づけにされていたのであるから、“口は災いの元”というのは、けだし真理である。

ジョン・ウェインが人気を博している国などとても好きになれそうになかったが、いかんせん、多勢に無勢、郷に入れば郷に従え、で英語が喋れないことにはどうにもならないという現実、私は悶々とした日々を送っていた。喋りすぎ気味の男にとって口が利けなくなるということがどんなに辛いことか、寡黙な人には理解できないであろう。ただ、私の気持を軽くしていたのは教授が“何かを研究して来い。”と言われず、“まあ 月給分だけは働くとして、アメリカを見て来い。”とだけ言って下さったことである。私流にそれを解釈するなら、“アメリカで飲んで来い。”と言われたことになる。

時差ボケもとれたある日、留学先の教授のペロさんが、“Dr イズミは、出る前に君に何と言ったか。”と尋ねられた。彼には彼の友人が私

に、“死ぬ気で研究して来い。”などとは絶対に言わなかったであろうことが判っていたのである。私は、“飲んで来いと言われました。”と正直(?)に答えた。それからというもの、土曜日の夕方何度となくペロさん宅に招かれ、奥様の素晴らしく上手な手料理と、酒倉から選り出された上等のワインを御馳走になった。私の返事を何か勘違いされたのではなからうか、と幾度となく思い悩んだものである。ある日のディナーパーティーの席上、彼は私に言った。“お前は Dr イズミによく似ているなあ。”と。これは大きな誤解であるが、ひょっとすると十数年前、泉教授も同じことを言われたのではなからうか、とふと思った。

旨いワイン、安い牛肉を胃袋に詰め込み、どこまでも続く郊外の雪原、雪に霞む林、凍りついて巨大な氷の柱と化したナイアガラの滝の壮厳な光景に心を奪われている内に、流刑の身とはいえ、私の心の中はしだいにハッピーになって来た。鉛色に低くたれ込めた雲や、いかなる妥協も拒絶するかのごとく断固として吹きすさぶ吹雪の雪原が独り者の心情風景と共鳴し、それらがいつの間にか妙に愛着のわく対象になって来たのである。

ところで、研究の方であるが、構えずに気楽に実験をすると不思議にうまく行くものである。ペロさんも私を絶対にせき立てたりはしなかった。毎日ただ“ハロー、ハロー。”と言われて部屋に這入って来られ、そのままスッと出て行かれるだけであった。

人の心の変わりやすさは、なにも女だけの特技ではない。冬も終りかける頃には、ひょっとしたら、ここは天国ではなからうか、と思うようになっていた。青空の見える日がしだいに多くなり、平野からしだいに雪が消えていったかと思うと、あちこちに色とりどりの花が咲きは

*相本三郎 (Saburo AIMOTO), 大阪大学, 蛋白質研究所, ペプチドセンター, 助手, 理学博士, ペプチド化学

じめた。オンタリオ湖岸などは行けども行けども、りんごや桃やさくらんぼの花に埋もれ、空から見ればそれらはきっと巨大な花のベルトに見えたことであろう。バッファローに着いた当初、“なぜ広い国でわざわざこんな寒い所に住むのですか。”とペロさんに聞いたことがある。“春になればその理由がわかるよ。”と言われたが、その意味がよく判った。

雪が消える頃には、“アメリカを見て来い。”との教授の言葉は、“アメリカで遊んで来い。”との新しい解釈に変わり、休日には愛車のピントに乗って郊外を200キロ、400キロと走り回るようになった。何キロも続く新緑の林を抜け出ると見渡す限りのトウモロコシ畑であったり、ポツリポツリとサイロの見える牧場だったり、春の訪れとともに突然目の前に現われて来たそれらの光景は、私をかって味わったことのない程の木の芽どきの心境にするに充分であった。

そんなある日、小さな村で道に迷ったのを幸いに、その美しい家並みをぼんやり眺めていた時のことである。ガヤガヤとチビッ子が5、6人やって来た。“どこから来たの。”と聞く。“日本だ。”“どこにあるの。”“こっちの方向だ。”と地面の方向を指さす。“何をしているの。”“道に迷ったんだが、余りにきれいな町なので眺めているんだ。”“お父ちゃんは何でも知っているよ。”というので、ワイワイガヤガヤ、ガチョウの団体のような彼らに囲まれて、彼らのお父ちゃんに会うことになった。丸太のような腕、節くれだった指、100キロはゆうにあると思われるその男を見て、はじめて本物のアメリカ人を見たという感動がこみ上げて来た。武骨にして親切なその男の説明で無事目的地に着いた帰り道、広大な大地に沈む太陽を見ながら、“ここで生まれていたら、どんな人生を選んだろうか。”とふと考えた。“はたして、ペプチド合成こそが人生よ、と思うに到ったであろうか。”私はとっさに思考のスイッチを切った。こんなことはゆめゆめ考えてはいけないのであ

る。私は一つ彼に聞きそこねたことを後悔した。彼のジョン・ウェインに対する見解である。同じ研究室に居たヘレンによると、アメリカの男はますます軟弱になり、今やジョン・ウェインのような男は皆無に近くなったそうである。独身主義者の彼女をそのお父ちゃんに会わせてやりたかった。

春も終る頃から、私がバッファローを去る少し前までに20名を越すお客さんをお迎えした。主としてナイアガラの滝を“研修”に来られた方々である。用意したアイモトパックは“ナイアガラの滝と北バッファローの旅”“南バッファロー田舎めぐり”“バッファローゴールドコース”の3種類である。どのコースを選ばれるかはお客様の研修意欲と暇な時間の程度による。多いときには、一週間に3度ナイアガラの滝を見物に行ったこともある。そんな時は、さしものペロさんも半ば諦め顔をされていたが、それでも、“この調子だと、Dr イズミの記録を破れる。”と励ましのお言葉をかけて下さった。

秋風が吹き始める頃、私はコネチカット州の小さな町に引越すことになった。バッファローでの滞在は11カ月という短いものであったが、私は、バッファローの人々、他国からの留学生など国は異なっても一生友達でありたいと願う多くの人々と巡り会うことができたことを幸せに思っている。

それから一年後、私は帰国の旅の途中、お世話になった方々にお別れの挨拶をするために、バッファローに立ち寄った。グレイハウンドのバスがコダックの町、ロチェスターを通過したあたりから、私は妙な感情にとらわれていた。その時、私は流刑地バッファローを私の新しい故郷と思いはじめていた自分に気が付いた。

最後に、私のわがままを最後までお許し下さった Bello 教授夫妻、Karthia 教授、および本留学の機会を与えて下さった泉教授に深く感謝いたします。